



東京ミッドタウンクリニックで癌治療一般に関するセカンドオピニオン外来を担当する高橋弘先生。東京慈恵会医科大学卒業後、ハーバード大学(米国、ボストン)留学を経て、東京慈恵会医科大学附属柏病院で内科医長。1999年に招聘され、2000年ハーバード大学内科准教授。帰国後はセレンクリニック(癌樹状細胞療法専門)で診療部長。

### セカンドオピニオン外来のかり方

1. セカンドオピニオン外来を実施している病院の所定の申込書(病院のホームページに書式が載っていることが多い)に必要な事項を記載のうえ、予約する。
2. 主治医にセカンドオピニオンを他院で受たいことを申し出て、診療情報提供書(いわゆる紹介状)、X線画像資料、各種検査データ等の提出をお願いする。同時に患者自身は病気の発端から現在までの経過、セカンドオピニオン外来で聞きたいことをまとめておく。
3. セカンドオピニオン外来の医師が申し込み内容・相談の可否を検討し、相談を担当する医師の人選も行い、相談日時を決定する。
4. 場合によってはセカンドオピニオン外来実施前に上記「2」で用意した資料類の提供を求められることもある。
5. 外来終了後はセカンドオピニオンに提出していた上記「2」の返却を受ける。
6. 後日、担当医師が主治医宛報告書を作成し、提出(多くは郵送)。

近年の医療技術の進歩は著しい。ひと昔前なら回復の見込みがなかった重大疾患にも、次々と治療法が生み出され、患者にとって選択肢は増え続けている。

けれど、それは医師の提案する治療法の数々を理解し、比較・検討した上で、患者が自己責任の元、みずから治療法を選択する義務を負わされたことを意味する。

「患者さんにとっては大変ですよ。その方の専門分野ではないはずの医学という領域に関し、場合によってはご自身の生命を賭けた決断を迫られるわけですから」と話すのは東京ミッドタウンクリニックのエグゼクティブメディカルドクター、高橋弘先生。

主治医から説明を受けても、医学の話は難しく、すぐに理解できるとは限らない。治療法に不安や疑問を感じることもあるだろう。

「そんな時、主治医以外で専門知識を持った第三者の医師が、中立の立場から助言すれば、患者さ

んはよりよい決断をできるでしょう。このお手伝いをするセカンドオピニオン外来が今、主だった病院に続々と開設されています」

セカンドオピニオン外来を受診するには、患者自身のデータを極力多く提出する必要があるため、主治医の協力は欠かせない。

だが、他の医師の助言を仰ぎたいと主治医に申し出ること自体に、気後れを感じる人もいるだろう。

「それは分かりますが、主治医の機嫌よりも命の方が大切です。診療内容をよく理解し、納得しておきたいからであることを、誠意をもって伝えれば、必ず理解を示してくれるはずですよ」

そして、セカンドオピニオンを受けた結果、主治医の方針に納得できれば、今の治療を安心して受け続けられるし、主治医との信頼関係もいっそう深まるだろう。

主治医にとっても、まさかの誤診を避ける好機になる。セカンドオピニオンは患者、医師の双方に

とって理に適っている。

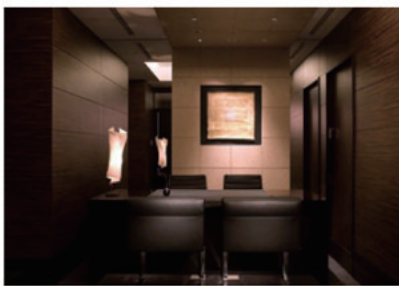
「東京ミッドタウンクリニックのセカンドオピニオン外来には、主な重大疾患に対し、第一人者のドクターがそろっています。高度先進医療や自由診療で今、どんな選択肢がありうるのか、保険診療以外にもいろいろとご案内ができることと思います」

初めてのセカンドオピニオンを受けるのなら、地域で評判の病院を訪ねるのもいい。あるいは、重大疾患に対し、大きな決断を迫られそうなら、情報力に秀でたクリニックを探すのもいいだろう。

### Tokyo Midtown Medical Clinic Secondopinion Counselling

東京ミッドタウンクリニックのセカンドオピニオン外来は完全予約制。一人当たり30分以上。他施設で診療中の場合は、診療情報(紹介状や画像資料、病理組織など)を可能な範囲で用意する必要があります。現在、外来で対応可能なセカンドオピニオンは癌、膠原病、リウマチ、感染症、循環器疾患、消化器疾患、肝臓疾患一般など。なお、提携病院のジョンズ・ホプキンスへのセカンドオピニオン依頼も可能。詳しくは03-5413-0080まで問い合わせを。

セカンドオピニオンはカウンセリングであって、治療ではないため健康保険は適用されないが、東京ミッドタウンクリニックの一般外来でももちろん健康保険が適用される。和の雰囲気が出うファサードは心なごむたすまいだ。



## 治療法を患者が選ぶ時代の セカンドオピニオン外来

欧米では当たり前前のセカンドオピニオン外来が日本にも増えてきた。東京ミッドタウンクリニックでは最新・最先端の医療情報をもとに、患者がよりよい決断をできるように、手助けをしている。

Photos : Masaru Suzuki Text : Masahiro Hiromatsu